

---

# 賭けの代償

さとの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
賭けの代償

【Nコード】  
N5081Q

【作者名】  
さとの

【あらすじ】  
バトリング場に訪れたバイマンとムーザ。バイマンが提案した賭けとは…？

「ほら、早くしろよ」

\*

啞然と、向かいの男を見つめてどのくらい経っただろう。実際には、まだ数秒も経ってはいなかったが。

「ルール、破るってのか？ん？」

「っっ…」

数時間前のことである。

暇潰しにと、町外れにあるバトリング場に訪れたバイマンとムーザは、けたたましく機械音を鳴らしながら戦うATを観戦していた。予想以上の戦い振りを見せたのか、周りが盛り上がり、同時にいつの間にか拳を握り、腕を振りながら応援していた。

そこで留まるならまだ良かった。しかし、一度付いた火は収まることを知らず、燃え上がるばかりだった。次のATがコロシウムに登場し、どちらが勝つのか観客達はがやがやと騒ぎ出した。

そこからが、始まりだった。

早くも結果を決めたバイマンが受付へと足を進め、勝者が書かれた紙切れを受付の男に渡そうとした、その時。

ぬっと、横に別の人物が紙切れを同じ男に差し出していた。その人物はムーザだった。

どちらを書いたのか、覗いてみると、何と反対側の相手だった。これには納得がいかなかった。前もって流れた情報を聞く限り、戦暦・戦闘力共にこっちの方が上なのは分かりきっているはずだ。そうになると、もはや恒例であるいがみ合いが始まるのは明確だった。お前情報ちゃんと聞いてたのか、頭おかしいんじゃないのか。それはこっちの台詞だ、あっちの奴の方がいい機体を使っている。性能もいい。それに、戦暦だって実際には大して差はない。このまま続く言い合いに埒があかないと踏んだのか、はあ、と息を付いて、バイマンはある提案を持ちかけた。

どちらかの予想が当たったら、敗者は勝者の言う事を一つだけ聞く。どこにでもあるようなごく有りふれた提案であるが、頭に血が登っているせいか、ムーザはそれを即行受け入れた。

バトルの合図が鳴り、会場は再び怒号の嵐に包まれた。殴り合いにより大きく鳴り響く金属音。ローラーの音。パラパラと落ちる部品。この試合を、バイマンは声を張り上げながら、ムーザは拳を握り締めて見守っていた。

開始から数分・勝敗が、決まった。

頭部に渾身のパンチを喰らわせ、相手の機体が後ろへと倒れ、コクピットが開いた。パイロットは半分延びかけた状態になっていた。

賭けの勝利者は、バイマンだった。

そして、現在に至る。

賭けに負けたムーザは、立ちすくんだまま呆然とバイマンを見つめていた。身体をわなわなと震わせながら。  
そうなるのも、無理はなかった。何故ならば -

『敗者は、勝者にキスをする』

ふざけるな、何でそんなことをと最初こそ喚いていたが、敗者であることを強く言っと、うっと黙り込んだ。  
こついう時、真面目な性格はいいものだ。変なところで律儀だからだ。

後は、ただ待つのみである。

(さて、どうするかねえ)

しばらく目の前の男を観察していると、漸く動きに変化を見せた。  
しどろもどろに動いていた目は、真っ直ぐにこちらを見据えた。  
左肩に手を置かれ、ぐっと押された。屈め、ということか。

「目え…閉じてろ…」

発せられた言葉に少々驚きつつも、言うとおりにした。  
羞恥に染まる顔を見てみたいという気持ちもあったが、これはこれでいいものだ。

段々近づいてくるのが分かる。微かな息が顔にかかる。  
静まり返ったバトリング場には、二人以外誰もいない。

もう少し、と思っていると -

ガリッ

「つてえ！」

途端、鼻頭に激痛が走った。

何事かと目を開けると、手の甲で口を拭いながら睨み付けているムーザの姿があつた。呆然としながら、痛む鼻に触れた。どうやら、噛まれたらしい。

「つてめ…！」

「…は…だ」

「あ？」

よく聞き取れなかった。もう一度答えを促すと、少し伏せていた顔を上げ、再びこちらをきつと睨んだ。

「キスは…キスだろうがっ！」

ふんつと鼻を鳴らし、踵を返し大股を開いて足を進めた。

「あ、お、おい！」

後を追いかけてようとして足を踏み入れかけたが、すぐに止まった。何故ならば、髪で見え隠れしている耳が真っ赤に染まっていたからだ。更に目を凝らすと、頬も赤くなっているのが分かった。

（成る程ね…）

「随分と激しいキスだなおい」

緩む口と、まだ痛みが走る鼻を押さえながら、バイマンはずんずんと進む男の後を追いかけるように足を踏み出した。

（後書き）

初投稿小説です。野望のルーツのこの二人が好きで書きちゃいました。これからもこんな感じの二人を書いていこうと思います。ここまで読んで下さりありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5081q/>

---

賭けの代償

2011年10月8日16時52分発行